

令和5年

7月の重要農作業

四国中央市農業振興センター

《問い合わせ先》

四国中央農業指導班

(畜産) 東予家畜保健衛生所

TEL 23-2394

TEL (0897) 57-9122

【作物】

1 早期水稻の管理

(1) 水管理について

- ア 中干し直後：2～3回走り水を行った後に、間断灌水を行います。
- イ 幼穂形成期～穂ばらみ期：土壌水分が不足すると収量や品質が低下するので、水分を十分保ちます。
- ウ 出穂期～出穂期以降：浅水管理（2～3cm）をします。異常高温が続く場合は、かけ流し灌水で地温を下げ、根傷みを防ぎます。
- エ 登熟期：灌水して土壌に水分を与えたら、水は溜めずに、足跡に水がたまっている程度（飽水状態）にします。
- オ 落水期：落水期は収穫前7日程度としますが、収穫作業に支障のない程度に刈り取り直前まで走り水灌水で土壌水分を保ちます。

(2) 病害虫防除

防除時期	病害虫名	農薬名 濃度 使用時期
出穂期前	紋枯病	バリダシン液剤5 1,000倍、収穫14日前まで
穂揃期～ 傾穂期	カメムシ類 (ウカ類、ツマガリコバ化にも有効)	スタークル顆粒水溶剤 2,000倍、収穫7日前まで

(3) 倒伏軽減対策（徒長等で草丈が伸びすぎ、倒伏の危険性がある場合）

薬剤名：ビビフルフロアブル

使用時期：出穂10～2日前（使用時期厳守）

使用量：10a当たり75～100mlを水50～150lに希釈して散布。

注意点：ムラのないよう均一散布し、多量散布や重複散布は絶対に行わないでください。

2 普通期水稻の管理

(1) 中間追肥

根の活力を高めるため、出穂40日前頃に、PKミックスを20kg/10a施用してください。

(2) 水管理(中干し)

必要茎数（約18～20本/株）が確保され次第、足跡が軽くつく程度に行います。中干しの目安は約7～10日間で、圃場により土の乾き具合が異なるため、土壌条件に応じて連続または間断での中干しをしてください。

(3) 病害虫防除

田植時に「箱維新粒剤」を使用した場合は、出穂期まで防除効果が期待できますが、水稻の生育状況や病害虫の発生状態をよく観察して病害虫防除を行ってください。 <桐野>

【野菜】

1 さといも

(1) 病害虫防除

ア 疫病

発生条件は、平均気温25℃以上で長時間の降雨条件(梅雨)により発病し始めます。

圃場内の排水を良好にして、停滞水がないようにしてください。

本市における平均気温25℃以上は6月中・下旬頃、初発警戒にペンコゼブ水和剤を散布してください。

疫病は、圃場周辺から発病してくる場合が多いため、圃場の観察を行い、発病を確認したら、ダイナモ顆粒水和剤を散布し、2週間後にカンパネラ水和剤を散布してください。

体系防除として、ダイナモとカンパネラ（2週間の間隔）を散布してください。台風前後は必ず防除してください。

農薬名	病害名	濃度	収穫前日数 / 回数	使用上の注意点
ペンコゼブ水和剤	疫病	500倍	収穫7日前まで / 2回	予防効果がある 高温多湿時葉害を生じるおそれがある
ダイナモ顆粒水和剤	疫病	2,000倍	収穫21日前まで / 3回	予防及び治療効果がある 感染直後でも、病気のまん延を阻止 連用すると耐性菌が発生しやすい
カンパネラ水和剤	疫病	1,000倍	収穫7日前まで / 2回	浸透性と浸透移行、高い耐雨性がある 高温多湿時葉害を生じるおそれがある

注意点：防除は灌水後夕方に行ってください。展着剤「まくびか」10,000倍を加用すると薬液がよく付着し、防除効果が上がります。

イ ハダニ類

高温乾燥が続くと圃場周辺の雑草から侵入します。増殖すると防除が困難になるため、低密度時から防除してください。

(2) 水管理

梅雨明け後に晴天が続く場合、灌水開始が遅れて乾燥により葉焼けを起こす場合があるので、土壌水分や生育状況を観察し適期に灌水してください。

(3) 施肥

おおなか作業を行った化成体系のさといもは、おおなか1ヶ月後を目安にして化成444を40kg/10a施用してください。

2 やまのいも

(1) 施肥

肥料吸収は、7月上旬から始まり8月に最大となります。JAの施肥設計を参考として追肥してください。最終追肥は8月上旬には終えてください。

(2) 病害虫防除体系

防除時期	薬剤名	病害虫名	濃度	収穫前日数/回数
7/上～中	アクラタ粒剤5	アブラムシ・ガレハカ	6kg/10a	萌芽期/1回、株元散布
	カネマイトフロアブル	ハダニ類	1,000倍	3日前/1回
	マトリックフロアブル	ハスモンヨトウ	2,000倍	前日/3回
	シトラノフロアブル	炭そ病	1,000倍	30日前/5回

防除時期	薬剤名	病害虫名	濃度	収穫前日数/回数
7/下～8/上	コロマイト乳剤	ハダニ類	1,000倍	7日/2回
	ペンコゼブ水和剤	炭そ病	600倍	21日/4回
	デルフィン顆粒水和剤	シロイチモジヨトウ	1,000倍	発生初期(ただし 収穫前日まで)/—

炭そ病対策として、台風、雷雨の後は、ラビライト水和剤400倍（14日/4回）で防除してください。 <可部>

【果樹】

1 温州みかんの摘果

樹の状態に応じた着果管理を進めて、M・S玉を中心とする高品質果実生産に努めてください。

(1) 着果過多樹

樹勢維持と隔年結果を防止するために、早急に、上部を中心に樹冠の1/3を全摘果して夏梢（次年度の結果母枝）を発生させます。

※発生した夏梢は、ミカンハマグリガ（エカキムシ）の発生に注意。

(2) 着果不足樹

粗摘果は行わず、仕上げ摘果または樹上選果により不良な果実を除去します。また、果実の周辺に光を当てて品質を向上させるために、かぶさり枝を除去してください。

(3) 着果、新梢ともに多い連年生産樹

品質向上のため、摘果は9月以降に重点を置いて実施してください。

2 中晩柑類の摘果

早期摘果による大玉果の生産に向けて、粗摘果は生理落果終了後すぐに始めます。粗摘果に重点を置いて実施し、葉が5枚以上ある優良な有葉果を中心に結実させます。主枝先端部や内・スソ成り果実、直花果、奇形果、傷果、小玉果などを摘果していき、8月上旬までには葉果比100程度に仕上げるよう計画的に作業を進めましょう。併せて、果実肥大と減酸を促すため、雨が少ない場合には、積極的に灌水を実施してください。

3 病害虫防除

黒点病の薬剤散布間隔は、前回散布後の累積降水量200～250mmまたは30日です。本病に弱い品種は散布間隔を短くし、最も弱い「せとか」は累積降水量180mmまたは25日を目安にしてください。 <可部>

【花き・花木】

1 シキミの管理

夏期は害虫の発生期です。お盆の需要期に向け防除を徹底してください。

(1) フシダニ類

4～9月にかけて、成幼虫が展開直後の柔らかい新葉や新梢を吸汁し、葉にモザイク状の輪紋が出現します。成幼虫は体長0.1～0.3mm、淡黄色～橙色で群生します。寄生枝を早めに除去してください。

(2) 輪紋葉枯病

病斑は1～2cmで赤褐色の同心円状の輪紋を生じ、その後病斑上に灰白色のキノコ状～球形の小型の菌体を形成し、ひどい罹病樹は落葉します。病葉は早めに除去してください。

(3) 病害虫防除

定期防除として、6月下旬～7月上旬に殺菌剤のベンレート水和剤2,000倍、殺虫剤のオルトラン水和剤1,000倍、ダニ剤のピラニカEW1,000倍を混用散布してください。

防除は高温時を避け、涼しい時間帯に行ってください。薬剤は葉裏にかかるよう、ていねいに散布してください。

2 ピットスポラムの管理

ピットスポラムは常緑低木で、光沢のある波打った葉がフラワーアレンジメントに用いられ、安定的な需要が見込まれます。

秋の出荷最盛期に向け、追肥：高度化成肥料（14-14-14）10kg/10a、アブラムシの防除：モスピラン顆粒水和剤4,000倍またはアドマイヤーフロアブル2,000倍を徹底してください。

なお、9月下旬から出荷を行う場合は、施肥により新芽が伸びて柔らかくなるため、9月の施肥は控えてください。生育が悪い場合や、木を大きくさせたい場合は9月も追肥をします。 <佐津間>

【畜産】

○家畜の生育適温と高温により生産に影響の出始める限界温度について

	適温域(℃)	生産に影響の出る限界温度(℃)
乳牛(成牛)	5～20	27
肉牛(成牛)	5～25	30
成豚	10～25	27
採卵鶏	20～30	32

四国中央市では今年例年より1か月以上早い5月上旬に27℃以上を記録しており、家畜の暑熱ストレス軽減がより重要となっています。

家畜の生育適温を考慮した温度管理の目標は27℃以下です。暑熱対策として、直射日光を防いで風通しを良くし、多湿になるのを防ぐのが畜舎管理の重要なポイントです。特に直射日光の遮断は最も重要であり、舎内の気温が上がらないように屋根や外壁に銀色寒冷紗やよしず等、断熱効果のある資材を効果的に設置してください。

また、同じ温度でも湿度が高くなると、畜体からの水分蒸発が妨げられるため、より暑熱ストレスがかかります。畜舎屋根や土間への散水・細霧冷房の実施は、雨天時など湿度の高い時には逆効果となりますので、天候の状況を見ながら送風機と併用して行いましょう。 <平野>